



豊中市教育センター  
〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600  
TEL 06-6844-5290  
FAX 06-6840-8127

平成 17 年 (2005 年) 1 月 24 日 第 11 号

## 震災 10 年 被災体験を語り継ぐ

昨年、日本では台風や地震、アジアでは津波など、自然が猛威をふるい多くの地域で大きな被害をもたらしました。多発した自然災害は子どもの世界でも関心を集めたようです。小学生など子ども向け検索サイトで最大手の「キッズ goo」の昨年の検索語ランキングでも「地震」「台風」が前年のそれぞれ 7 位から 5 位、18 位から 9 位となり、地震と台風の検索数は年間を通じて上位であったと報告されています。

1 月 17 日は阪神・淡路大震災から 10 年という節目を迎えました。そのためテレビ番組や新聞記事でも津波のニュースとあわせ、震災・復興の特集が目立つこの頃です。

10 年前の大地震、私たちの豊中市では…。当時比較的被害が少なかった中部の小学校で担任していた 6 年生の記録 (短歌調) に「寝ているとグラグラゆれる豊中市 タンスが落ちてみんなびっくり」「すごく揺れ 泣いて叫んだあの朝は 鳥肌が立ち布団に潜る」「家の中すごくメチャメチャ コップ割れ 後かたづけに学校遅刻」などとあり、大地震を初めて体験した気持ちがあらわされています。豊中市全体でみると、死者、倒壊家屋、避難所での避難生活者数等、大阪府内で最大の被害を受けました。学校も避難所として市民の生活の場となり、多くの先生が支援に携われました。

私たちは身近で起こったこの地震で、地震の恐ろしさ、多くの命が奪われたこと、町の倒壊、人と人との支え合いなど、多くのことを身をもって体験し、学びました。そしてこれらは忘れてはならないことばかりです。

前兵庫県知事で財団法人「阪神・淡路大震災記念協会」理事長の貝原俊民さんは「一人ひとりが防災意識を高め、共有する。心構えと備えが犠牲を最小限に食い止める最大の手段であることを忘れないでほしい。」と、また普賢岳の火砕流で犠牲者がでた島原市の当時の市長鐘ヶ江管一さんは、被災体験の風化が一番こわいと今でも体験を全国で語り続け、「亡くなった人に報いるとしたら、残った者たちができる限りの備えをすることだ。」とおっしゃっています。(朝日新聞 1 月 8 日朝刊より)

今年は、自然災害から身を守ることに、わたしたちにできること、しなくてはならないことを考えさせられる新年の幕開けとなりました。今の子どもたちに自らの被災体験を語り継ぐことも、私たちにできる防災の一つではないでしょうか。

最後になりましたが、被災者の皆様にお見舞いを申しあげるとともに亡くなられました皆様のご冥福をお祈りいたします。(酒井典子)

## 東部ブロック

第八中学校 11月11日(木)

**授業**：3年国語 トーベヤンソン（渡部翠訳）『猫』で小説の読み方を教える

**授業者**：児玉健太郎教諭 **指導講師**：大阪教育大学 松山雅子教授

**取組から**：国語は言語技術を教える教科だと考えている。教材を教えるのではなく、教材で教える、「教えた読み方は、他の小説を読む時にも使えるものである」というのが、言語技術教育の考え方かと思う。小説の場合は構成読みが第一段階、第二段階が形象読み、第三段階が主題読みということで教えている。ここでは構成読みを中心に行った。小説は、事件があり、事件は何かと何かの対立として捉えられること、導入・展開・山場・終結と四つの部分で構成されていることを教えている。今日はクライマックスをみつける授業討論をした。討論の課程でいろいろな読みが出てくるのがいいことだと話している。

**指導講師から**：私にとって国語科で一番大切にしたいものは、小説なら小説をどれだけ豊かな自分のことばで語り直せるかだと思う。私たち国語科の教師が評価する対象は語り直して見せた子どものことば以外の何ものでもない。語り直して見たとき、初めて、一人の子どもは自分がどのような読み手であったかを知りえる。子どもたちは一人で放っておいても物語を読む。心の中にちょっと物語ができる。そのできている物語を他者と分かち合いたいと思わせるためには、方法がある。それが指導力だ。一人の国語の教師として、子どもたちが語り直したことばにかけて授業を組んでいくべきと思う。

## 南部ブロック

庄内西小学校 10月22日(金)

**授業**：3年算数 少人数指導を生かした基礎学習の充実

**授業者**：石橋達夫教諭 山中照子教諭 松村廣子教諭

**指導講師**：大阪教育大学附属池田小学校 佐藤学教諭

**取組から**：本校では、子どもに何とか基礎的な力をつけることをねらいとし、課題部と少人数加配を窓口にし取組を始めたところです。3年生では、「学習集団作りを基盤とした、基礎的・基本的な学力の充実に向けた授業改革」を受け、学び合える集団作りをめざして、次の4つの視点を大切に算数の授業づくりを進めることとしました。

- ①自分で考える場の保障
- ②自分の言葉で表現する場の保障
- ③友だちのがんばりを認めあえる場の保障
- ④一人ひとりが、わかった・できたと感じることができる場の保障

本時では、体験を通して実感を伴った気づきがあれば理解がより深まると考え、測定活動を大切に、評価の観点を明記するとともに、振り返りカードで自己評価活動も取り入れました。

**指導講師から**：様々な指導形態があり、全ての指導形態に長所・短所があり、そのところを踏まえていかねばならないと考えます。習熟度別の形態を実施する時には保護者の理解を得られるのかどうかの問題のひとつとなります。私たちが体験してきた学級経営では、できる子ができない子を助けてほしいし、

できない子も努力して欲しいというように学級集団をつくってきました。習熟度別授業が多く取り入れられてきている背景としては、遅れている子、理解の進んでいる子が問題になっていることと、また今までとは違った理解の仕方をしている子どもがいるということがわかってきているということがあげられています。こういったことは子どもたちの躓きを何とかしていきたいという先生方の願いでもあるのではないのでしょうか。



## ブロック

本年度も、ブロックが実施されました。合同加を得て各校園の日ご議論が行われました。本中学校それぞれが、授けない研究協議を実施する種間のスムーズな接続としております。

ここに公開していた研究協議の概略を掲載していた校園の教職員のみ、今後とも子どもとの授業作りの場を作って

## 北部ブロック のばたけ幼稚園 9月16日(木)

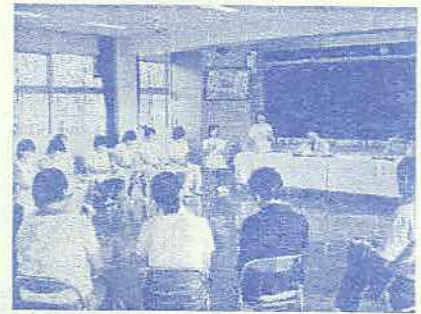
保育：年少・年長 親と子のごっこ遊びを通して一人とかかわる力を育てるための援助のあり方

保育者：全教員 指導講師：元さかえ幼稚園長 谷田瑛子

取組から：幼稚園での生活はすべて遊びだが、学びにつながるもので

ある。けれども、学校での学びとは違う。効率を求めず、試行錯誤の過程や動機を大切にしたい。今、幼稚園は地域の子育てセンター的役割として、育児相談・地域への園庭開放・預り保育などしている。また、親と子、保護者同士、他の子どもと親がお互いにかかわりあい、子育てが楽しいと思え、共に支えあい助け合って成長しあえる関係が少しでも生まれるようにとの願いから、昨年度より保育参観を参加型参観として親子で様々な活動に取り組んできた。今回は「お店屋さんごっこ遊び」を企画した。

指導講師から：子どもには発達段階があり、4歳児と5歳児でも違う。コミュニケーション力に違いがある。学びの連続性をカリキュラムとして作ってほしい。神戸大学発達科学部附属明石小学校では、幼小一貫のカリキュラムを作っている。学びの連携である。教育目標は違うが、学びの継続性を前提として、よりよい人間関係を作っていきたいという思いがある。豊かに表現しよく考える力、生き方、生活を作っていく力について、4歳は4歳として、5歳は5歳として、一年生は一年生としての目標をたてて力をつけてほしいと思う。連携をして子どもの心を育ててほしいと願っている。



## 交流研修

交流研修(アカデミー研修)計160人を超す教職員の参るの取組の公開と研究協研修は、幼稚園・小学校・業公開並びに校種の垣根のすることで授業改革及び校と連携を図ることを目的

いただいた各校園の取組と研たします。公開していただいさんに感謝するとともに心のふれあいや魅力あるいきたいと考えています。

## 中部ブロック 第十六中学校 11月16日(火)

授業：2年数学 単元内容による少人数編成の取組み(図形分野)

授業者：大家幸子教諭 田中重春教諭

指導講師：京都産業大学 西川信廣教授

取組から：数学科では、教科内容によりつまづく生徒が多くなる2年生で、理解度に差が出やすい単元において少人数指導を行っている。生徒の希望を尊重し大クラス(発展的内容を取入れ、やや速く進むコース)小クラス(基礎的な内容を中心にゆっくり進むコース)とにわけ、個に応じたきめ細やかな指導となるよう努めている。学校全体としても、生徒がわかる喜びや達成感を味わえるよう個に応じた指導に努め、授業の工夫改善を進めている。

指導講師から：「習熟度を考慮した少人数指導は、人権教育である。」と東大阪市立長瀬北小学校では明確に主張している。貝塚市立第三中学校では、「習熟度別指導は、自らの課題に向き合い、それを克服する過程である。」と述べている。生徒が、小グループにわかる時に大切な事は、自分はどこまでわかっているのかな、ちょっと自信がないかな、ということ自分で考えることである。自分ができなければ、それを認めて、以前習ったことをもう一度学んでみようとするのが、自分の課題に向き合うことである。そういう観点で、習熟度を加味した少人数指導は必要だと考える。クラスを単純に2分割しただけの小規模授業の最大の問題点は、これまで先生が行ってきた授業のパターンが変わっていないことである。学習者が減るだけで、先生の授業は変わっていない。私は、「大阪のフロンティア」とよく言う。人権を柱にし、どの子も見捨てずどの子もわかる授業をするのが大阪のフロンティアである。少人数指導の一番のポイントは、グループを分けたなら、そのグループにはどういう質的な学びの違いがあるのかを教師がきちんと把握することである。次に、生徒がなぜこのコースを選ぶのかを自分自身の言葉で言えることが大切である。

## 温かい見守り

教育センターの教育相談には、子どものことでいろいろな悩みを抱える相談者が訪れます。ある日、ひとりのお母さんがA君を連れて来所されました。教室で落ち着きなく動き回り、お母さんに叱られ続ける小学1年生のA君。A君は時々「お母さん怒らんといて」「僕なんていない方がいいんだ」「死にたい」とお母さんに言うそうです。そう言われてお母さんはハッと我にかえり、A君がかawaiiそうになり、“叱りすぎたな”と思い、悲しくなるそうです。よく聴くとお母さん自身も「子どもの頃母親から叱られ続けて育った」そうで「A君に腹が立つといつまでも怒り続け、とまらなくなる」とのこと。

子育てへの不安を子どもにぶつけて叱り続けてしまう相談者は日々の相談活動の中で多く見受けられます。ドロシー・ロー・ノルト（アメリカの家庭教育子育てコンサルタント）が「子どもを責め、厳しく叱りすぎると子どもは自信を失い、自分をだめな人間だと思ってしまうようになります。厳しい罰を与えるよりも、子どもを支え、励ましたほうが子どもはよく学ぶものなのです」と言われています。

このお母さんについても同様のことが言えるのではないのでしょうか？本来、子育ては子どもの周囲の人全体で行うものですが、一人で背負い込み疲れているお母さんが見受けられます。子育てで悩んでいるお母さんを、家族、友人、担任などの周囲の人たちが「お前が悪い」と責めるのではなく、お母さんの愚痴を丁寧に聴き、温かく見守る接し方がお母さんを育てお母さんの子どもを支える力を育てるのではないのでしょうか。今後も、悩み傷ついている相談者のしんどさを受け止め、相談者がほんの少しずつでも子どもの気持ちにそった接し方ができるように、日々の相談活動を大切にしていきたいと思えます。（竹田）

